

〔研究ノート〕

博物館実習を通じた地域連携の試み：  
文教大学国際学部の博物館学芸員養成課程の事例

井上由佳，藤田百合

〔Research Note〕

**Region and University Partnership through Museum Practice Program:  
A Case Study at Faculty of International Studies, Bunkyo University**

**Yuka INOUE Yuri FUJITA**

This article presents a case study of Museum Practice program (*Hakubutsukan Jisshu*) which aims to promote partnership between the region (i.e. Chigasaki City) and Bunkyo University Shonan Campus. Museum Practice program is a mandatory module for undergraduate students in Japan to obtain the museum curator qualification from their university. The new Department of International Tourism, and Hospitality Management, Faculty of International Studies at Bunkyo University decided to start this museum curator course from 2008 and this Museum Practice program has been running since 2010.

In Japan, most universities which runs museum curator course send their third or fourth year students to museums and other museum-related facilities, in order to practice their curatorial skills and techniques on the spot. The aim of Museum Practice program is, according to the changed Museum Act and to the guideline issued by the Ministry of Education, Science and Technology in 2009, to train students in the museum environment under the instructions from the curators. In this way, students are expected to acquire practical curatorial skills and to deepen their understandings towards museums. However, there has been a long debate regarding the management of this program in both museums and in universities and those issues have not been solved yet.

From the beginning of this program, the faculties at Bunkyo University aimed to enhance students' motivation and to raise their learning outcomes by involving regional institutions and their staff. As a result, students had an opportunity to work with various professionals and to plan and create an exhibition from the scratch. The exhibitions were opened to the public and not only the students, but regional citizens and university faculties also enjoyed them and provided positive feedbacks. Although, this new practice is at its beginning stage, this article suggests an experimental case of how Museum Practice program can contribute to region and university partnership.

## 1. はじめに

日本において博物館学芸員の資格を取得する場合、そのほとんどが全国の大学に設置されている学芸員養成課程の所定科目を履修することによって大学より認定される人が大多数を占めている。文部科学省社会教育課の調べによると、平成20年9月の時点で311大学にて9577人の学生が学芸員

資格を取得しているという。この調査結果から、日本の大学は年間に約1万人の学芸員有資格者を輩出していることになる。

博物館学芸員養成課程は、2009年4月30日に公布された「博物館法施行規則の一部を改正する省令」(平成21年文部科学省令第22号)に伴い大学学部で取得されるべき科目名が変更された。この変更は平成24年4月1日から施行され、現在に至る。学芸員養成課程において履修が求められている科目とその単位数は表1の通りである。

表1 「博物館に関する科目」

・生涯学習概論(2単位)	・博物館概論(2単位)	・博物館経営論(2単位)
・博物館資料論(2単位)	・博物館資料保存論(2単位)	
・博物館展示論(2単位)	・博物館情報・メディア論(2単位)	
・博物館教育論(2単位)	・博物館実習(3単位)	

これら19単位分の科目を学部卒業時まで履修することで、学芸員資格は各大学によって認定されている。

この資格制度が抱えている問題は多岐にわたっている。ここでは主な点を二つ取り上げたい。一つ目は、高等教育機関への進学率が上昇した今日において、博物館法が最初に制定された1950年代と同様の教育内容・方法で資格を出すことに問題はないのかという点が挙げられる。なぜなら、日本の大学進学率はこの60年間で飛躍的に高まり、当時の少数派でエリートであった学生層と現在の学生層は明らかに異なるからである。博物館法が施行された1951年の3年後である1954年に実施された文部省学校基本調査によれば、大学(学部)への進学者(過年度高卒者等を含む)は、7.9%(男性:13.3%、女性:2.4%)である。最新の2015年度と同調査では、51.5%(男性:55.4%、女性:47.4%)となっており、その数値には大きな開きがある。大学進学率が10%に満たなかった頃と50%を超えるようになった現在、大学学部で所定科目を修得したことで専門資格を与えるという仕組み自体に問題がないとはいえないのではないだろうか。

日本の学芸員資格制度の問題点の二つ目としては、毎年約1万人の学生が学部卒業と同時に学芸員資格を取得しているにも関わらず、実際に学芸員として就職している者は任期付き等を含めても百数十人足らずであるという実状<sup>1</sup>である。これは全体の約1%にあたる。学芸員については大学で資格を得ることはできるが、その資格を活かすべく学芸員になろうとしても、実際にはなかなかないという現状が少なくとも25年前から指摘されている<sup>2</sup>。これは簡単に解決できる問題ではないが、資格制度が現実に見合っていないとも考えられるのではないだろうか。就職先が極めて限定されているにも関わらず、資格保有者が量産されている現状は見直す必要があるだろう。

なお、本稿では学芸員資格制度ならびにその養成課程全般の諸課題についての議論は紙幅の都合上、取り上げないが、これらの課題に関する詳細については浜田弘明(2015)の論文を参照されたい。

このような大きな課題を抱えている学芸員課程ではあるが、新しい可能性を秘めている部分もある。それは博物館実習という、学芸員養成課程の集大成にあたる科目において、その進め方に創意工夫を加えることで、学生たちの学芸員としての資質を鍛錬するだけでなく、彼らの力で企画し制作された展示などを校内や地域の人々にも公開することで、大学と地域との連携にも貢献できるという部分である。

文教大学国際学部では2008年度入学生から主に国際観光学科に設けられた専門科目群を履修することで博物館学芸員資格を認定してきた。学芸員資格を取得した学生の数の推移は表2の通りである。

表2 国際学部学芸員任用資格要件の充足者数【入学年度別】

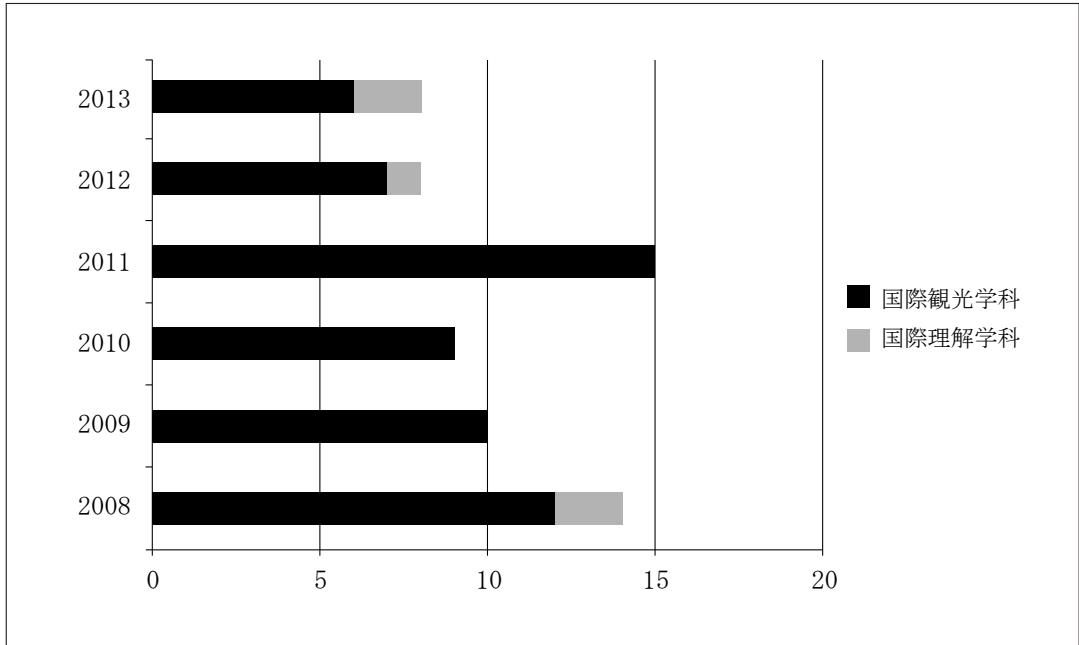


表2の通り、毎年8名から15名までの主に国際観光学科に所属する学生が学芸員資格を得ていることがわかる。国際学部の定員は2015年5月時点で国際理解学科が120名、国際観光学科が125名となっている。学科間に資格取得者の隔りがあるのは、国際観光学科に学芸員養成課程の専門科目の多くが設置されていることが理由として推測される。将来的に学芸員養成課程を全学部に開放するのであれば、この点についても再考しなければならないであろう。

## 2. 博物館実習の概要

博物館実習とはそもそも何を指しているのか。まずはその法的な位置付けを整理したい。博物館実習は、「博物館法施行規則第1条に基づき、大学において修得すべき博物館に関する科目の一つとされており、登録博物館又は博物館相当施設(大学においてこれに準ずると認めた施設を含む。)における実習により修得するものとされている<sup>3)</sup>と定められている。本稿の前節でも述べたように、学芸員養成課程では学生たちが博物館に関する専門科目を体系的に学んでいくわけであるが、それだけでは机上の空論になりかねない。そのため、「博物館の専門的職員たる学芸員としてのスタートが切れるだけの基本的な素養を身につけるためには、それらの知識・技術や理論を生かして現場で博物館資料を取り扱ったり、利用者に対応するなどの実践的な経験や訓練を積むことが必要である<sup>4)</sup>」という考えのもと、博物館実習が設定されている。

実際の実習については、各館園がそれぞれの専門性と館の特徴を生かした内容のプログラムを5日間から10日間ほどの日程で組み、実施している。受け入れる実習生の数はその館の規模と受け入れ体制によって大きく左右され、若干名というところから数十名ほどの大人数を受け入れるところまでである。実習の時期は、大学の長期休暇に合わせているところが多いが、各館園が独自に決めているケースが大半であり、時には同じ年度内に2期に分けて実習させる例もある。実習生の募集要項が館のウェブサイトなどで公表され、それを見て学生が応募する場合もあれば、館園から募集の通知が大学にあり、それに応募するという場合もある。時には大学が館園側に打診して、受け入れの内諾をもらってから学生に応募させるというやり方をしているところもある<sup>5</sup>。受け入れの際には、定員を超えた場合などに応募書類や面接による選抜を行う館園もある。本学でも希望していた館園の選抜に漏れてしまい、第2希望の館園で実習した学生もいた。しかし、これは例外的なケースであり、その多くは希望の館園で実習をしている。

次に博物館実習の「ねらい」が明示されている文章として文部科学省が2009年4月に発行した『博物館実習ガイドライン』から以下に引用したい。

ねらい

- 博物館実習は、学芸員養成教育において学んだ知識・技術や理論を生かして、学内及び館園での実体験や実技を通して、学芸員として必要とされる知識・技術等の基礎・基本を修得することを目標とする。
- 博物館実習は、大学における学芸員養成教育の最終段階における科目と位置づけることを基本とするが、その準備段階として早期から館園見学や学内での実務実習等を通じて博物館の仕事や役割に関する理解を深めていくことが望ましい。(略)
- 「学内実習」においては、博物館における館園実習の事前・事後指導と他の科目の補足を兼ねて、学内の実習施設等において資料の取り扱いや収集、保管、展示、整理、分類等の方法、調査研究の手法等について学ぶことを目的とする。
- 「館園実習」においては、学内実習で学んだ内容を博物館の現場で実際に経験することで、博物館の理念や設置目的、業務の流れ等に対する理解を深めると同時に、博物館資料の取り扱いや教育普及活動、来館者対応等実務の一端を担うことにより、学芸員としての責任感や社会意識を身に付け、博物館で働く心構えを涵養することを目的とする<sup>6</sup>。

上記のとおり、博物館実習とは学芸員養成課程の最終段階にある総仕上げの意味を持った科目として位置づけられ、それまでに学んできた知識や技術を実際に経験することで学芸員としてのスキルと博物館現場への理解を深めるためのものである。このような趣旨から、この科目は多くの大学で4年生を対象に開講されているが、本学では昨今の就職活動の早期化などを考慮し、3年時に履修するように設定している<sup>7</sup>。

### 3. 博物館実習の現状と課題

学芸員資格制度全体に関する主な課題については第1節にて先述したが、博物館実習が抱えている課題にはどのようなものであるのかについて、本節ではその現状を踏まえて述べたい。

博物館実習は、法的に各大学ならびに実習先の館園がその内容や進め方を決めることとされているため、その内実については千差万別であり、一括りにして議論することが難しい。しかしなが

ら、学芸員養成の関係者と文部科学省の間では、実習生を受け入れる博物館側の現状のメリットとデメリットについて、表3のように認識していることがわかる。

表3 館園側にとっての博物館実習生を受け入れるメリットとデメリット

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"> <li>・定期的に実習生を指導することから、(学芸員としての)基礎・基本の確認がとれる。</li> <li>・第三者の視点から日常業務を確認することができる。</li> <li>・博物館活動を見直す機会になる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受け入れ体制が不十分である(指導する担当者の調整、場所が確保できない、予算がつかない等)。</li> <li>・実習生を送り出す大学・実習生となる学生の態度や目的意識が千差万別であることから、受け入れが負担となっている。</li> </ul>

(文部科学省(2009)『博物館実習ガイドライン』p.1より)

上記は館園側からの認識であるが、大学側からすると、館園ごとに募集時期や応募方法が大きく異なること、期間や実習内容も大きく異なること、館園によっては学生の専門を限定したり、大学院生に限って受け入れているなどがハードルとなる場合もある。また、実習先ならびに実習時期が館園ごとに異なることもあり、館園と大学側で密に連絡を取り合うなども実際には難しい。文部科学省のガイドラインでも「博物館実習については、これまで以上に大学と博物館の連携・協力を緊密にし、その内容を精査することが求められる<sup>8)</sup>。」とあり、具体的なガイドラインを例示することで、その内容がより充実していくことを狙っている。ガイドライン策定後、博物館実習の内容がどのように変化したのかについては、今後の検証が待たれる。

#### 4. 文教大学国際学部における博物館実習(2010～2015年度)

##### 4.1 2010年度博物館実習・第1期生：巡回展「クジラとぼくらの物語」開催による学内・学外実習

文教大学国際学部における初めての博物館実習は2010年秋 Semester に開講した。表2にもある通り、この時の受講生は14名であった。この年度の学内実習については既に井上と清水による報告文<sup>9)</sup>が英文でまとめられているが、今回は改めてその概要と成果について述べたい。

初めての博物館実習を本学で実施するにあたり、学芸員養成課程の担当者間でいくつかの懸念事項が生じていた。それは、①国際学部という学際的な学部で学芸員養成教育を受けてきた学生たちを受け入れてくれる館園がどのくらいあるのか読めなかったこと、②学外実習に学生たちを送り出す体制が大学側でまだ不十分であったこと、③大学博物館を持たない本学のような大学においても、学外実習で学ぶことに近いものを学内において実施できないかを検証したかったこと、である。

まず①については、文学部の史学科や考古学科等のように、専門性がある程度明確な学生たちの受け入れには十分に慣れている館園も多いが、国際学部の学生の受け入れとなった際に館園側どのように反応するのかを予見することが難しく、14名もの学生を受け入れてもらえることに不安を覚えたことが挙げられる。②については、他大学の体制の聞き取り調査をした上で参考にして翌年度には準備が整えられた。そして、③については、筆者井上の出身大学においても博物館実習は学外実習を学内で行う考古学を中心とした実技実習ならびに展覧会の企画とそのプレゼンテーション・批評検討会という内容に置き換えられていた経験から、形を変えて学内にいながら、学外実習に相

当するやり方ができるのではないかと考えた。

検討した結果、初年度については平成22年度文教大学学長調整金による事業支援を受け、巡回展示「クジラとぼくらの物語」を湘南校舎にて同年10月に開かれる大学祭である聳塔祭にて開催することとなった。そして、審査の結果、2010年4月に「学芸員課程専門科目『博物館実習』と連動させた巡回展示『クジラとぼくらの物語』展開催」が学長調整金からの支援を受けることが決定された。この支援によって、この巡回展開催に伴う郵送費や展示の設置と付帯事業として実施した二種類のサイエンスカフェに複数の専門家を呼ぶことが可能となった。しかしながら、この巡回展を毎年開催することは郵送費などの多額の経費が必要となることから難しく、したがって次年度以降のやり方はさらに検討が必要であった。

「クジラとぼくらの物語」展は巡回専用のポータブルな展示として制作され、NPO法人ミュージアム研究会によって企画され、運営されている。これまでも学校の体育館や港の待合室、科学館等で公開してきた実績があり、文教大学の直前には国立科学博物館にて開催されていた「大哺乳類展—海のなかまたち」(会期：2010年7月10日～9月26日)に合わせてその一部が公開されていた。巡回展の内容は、お茶箱に詰められた体験型の展示を通して、地球上で最大の哺乳類であるクジラの生態と私たち人間とのかかわりが理解できるものとなっている。展示の制作にはクジラの専門家や展示デザイナーに加えて、博物館教育の専門家も加わることで、体験型展示(ハンズ・オン型)を基本としながら、クジラの生態が幅広い年代の人々に分かるようにデザインされている。この展示の一つの特徴は、巡回用に特化してデザインされたことから、ほぼ総てのコンテンツが「お茶箱」におさまるように作られており、実際の展示でもこの「お茶箱」をベースに組み立てるようになっている。

文教大学の博物館実習でこの展示を開催するためには、博物館実習を履修予定の学生たち自身にクジラについて学んでもらうことが必要であった。そのため、先行して本展示を公開していた国立科学博物館の「大哺乳類展—海のなかまたち」展を全員で見学し、クジラの生態について概要を理解するとともに、実際の「クジラとぼくらの物語」展を見ることで、自分たちがこれから担当する展覧会を体験してもらった。この他にもクジラに関する知識と情報を蓄えるために関連文献を読んでもらった。また展示の準備に入った9月以降にはクジラの専門家を大学に招き、それまでに分かってきたこと、まだわからない点について質疑応答を通して理解を深めていった。さらに、既存のお茶箱コンテンツを展示するだけでなく、これまで実習生たちが調べてきたクジラに関する知識を展示として新しく加えた。実習生は三つのグループに分かれてこの追加する展示の準備を進め、「くじらと食」「くじらのストランディング(座礁・漂着)」「神奈川とクジラ：ペリーから見た神奈川とクジラの関係」をテーマとする体験型の展示を制作し、本番で一般に公開した。

やはり一つの展示を短期間であれ開催するとなれば、主催者となる実習生にはその展示に関する知識を身に付ける必要がある。また博物館の教育普及の側面を体験してもらうために、実習生たちには本番の三日間、ローテーションを組んで展示会場にファシリテーターとしてスタンバイしてもらうことにしていた。その際には、どのように来場者と対話すればいいのか、質問を受けた場合の対応などを事前の授業内で確認し合った。

このような入念な準備を積み重ね、2010年10月22日から24日にわたって「クジラとぼくらの物語」展は文教大学湘南校舎の厚生棟1階と2階を使って公開された。三日間で500名以上もの来場者を集め、その反響は聳塔祭実行委員会が行った来場者による催し物の人気投票によって、「教室大賞」を受賞したことからも、一定の評価が得られたことがわかる。実習生たちは国際学部という生物系の学部ではないにも関わらず、クジラの生態と人間社会との関わりというテーマに取り組み、内外

にこの展示を広報し、本番ではファシリテーターとして来場者と向き合った。この実習を通して学生たちは、学芸員に求められているスキルをバランスよく経験し、発揮する機会となったのではないだろうか。しかしながら、この巡回展を開催するためには多大な経費が掛かるということ、秋 Semester に博物館実習は開講するが、学祭に出展するには春から準備が必要であったこと(この年度は偶然にも実習生の多くが井上ゼミナールの学生であったため、春から動くことができた。)から、このパターンの学内実習は一回限りとなった。

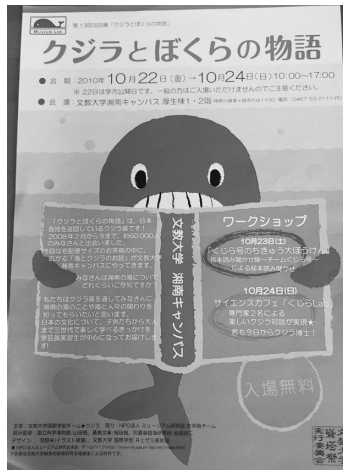


写真1 「クジラとぼくらの物語」展のチラシ・会場の様子(2010年10月、実習生撮影)

#### 4.2 2011年度博物館実習・第2期生：茅ヶ崎市美術館において「僕らの青春」展の開催

この年度の博物館実習にあたっては、当該科目の担当者が育児休業に入っていたという事情があったことから、実習生たちを学外の館園に送ることを見送った経緯があった。館園実習に代わるものとして、この年度の博物館実習を担当した非常勤講師の奥本素子先生は、実習生たちに企画展示を一から考えさせ、それを一般の人々にも見てもらえるように茅ヶ崎市美術館の展示室を借りて公開するという内容の実習を計画した。

プロジェクト・ベースト・ラーニング(PBL)の手法を用いて授業は進められ、実習生たちは複数回にわたるブレインストーミングを経て、展示のテーマを主に文教大学国際学部における学生生活を紹介することに決めた。このテーマであれば、それぞれ別個の興味関心を持ち、専門ゼミナールの所属先もばらばらであった実習生たちも協力し合って取り組めるということであった。

最終的に「専門ゼミナールでの学び」「短期留学・海外研修」「サークル活動」という小テーマから構成された「僕らの青春」展が完成し、2012年3月28日から31日まで、茅ヶ崎市美術館の第3展示室を借りて公開された。専門ゼミナールの紹介については、フードマネージメントをテーマとしたゼミと、観光におけるホスピタリティをテーマとしたゼミに焦点をしぼり、ゼミ活動の具体的な紹介を写真と文章で解説した。これを作成するにあたって、実習生たちはそれぞれのゼミ生から情報を集め、編集したという。「短期留学プログラム」については、米国のオレゴン州立大学(OSU)とオース

トラリアのモナッシュ大学に2年生の春semesterに約3か月間留学した学生たちが、どのような日々を現地で過ごしていたのかを写真や実物のテキストと共に紹介された。「サークル活動」については、学外での演奏も活発に行っている和太鼓サークル「楓」やアカペラサークルの「Cyan(シアン)」が映像とともに紹介された。学生による市民のための大学紹介が展示として完成したのである。



写真2 茅ヶ崎市美術館との共催展

「文教大学 僕らの青春：文教大学地域文化デザインプロジェクト」ポスター・展示パネルの一部  
(2012年3月、実習生撮影)

この年度の実習の評価されるべき点は、学生オリジナルのコンテンツで展示を制作したことと茅ヶ崎市美術館に協力を仰ぎ、会場を借りたことであろう。美術館という公共施設において、実習生たちが懸命に作った展示を公開することで、市内にありながら市民からすれば日常的には接点を持ちにくい大学の姿を、一般の来館者に知ってもらうことができたことの意義は大きいだろう。大学への入学を検討している高校生とその保護者ならば、オープンキャンパス等で大学に足を運ぶことがあっても、それ以外の世代の人々が大学生活について身近に知る機会はその頻繁にはない。また、公開日に展示室でスタンバイしていた実習生たちも来館者と接することで、展示を作ることの責任とそれを見る人々がどのように反応するものなのかをつぶさに感じ取ってもらうことができた。この展示に使われたパネルはその後、大学のオープンキャンパスでも活用することとなった。そのような意味でも、自分たちの学生生活について客観的な立場から内容を整理し、パネルにまとめて発表したことの意義は大きかったといえる。

さらに、茅ヶ崎市美術館においては、この会期中に地域のミュージアムをテーマとしたシンポジウムを大学と共催して開催したこともあり、文教大学と茅ヶ崎市美術館との連携がここからスタートしている。



しかしながら、問題点も散見された。一つには実習生の中に学芸員課程を学んでこなかった学生が複数存在していたことである。これは履修登録手続きの際に履修要件を満たしているか否かの確認ミスによって生じた問題であったことが、後に判明した。つまり、博物館実習を受ける要件を満たしていない学生が紛れ込んでいたのである。このため、博物館実習という科目が学芸員養成課程の総仕上げとして設定されているにも関わらず、博物館学等の知識も資格取得の意欲もない学生が混在してしまい、同じ目標に向かって実習を進めていくことが難しい側面があった。これは大学側の反省点である。また、美術館との連絡調整もうまくいかない部分があり、美術館側の期待する展示のクオリティーに応えることができなかった点も課題として残された。学外の公共施設などを活用する場合、入念な打ち合わせと調整が求められることが改めて確認された。

#### 4.3 2012年度・第3期生/2013年度・第4期生：「行谷展示室リニューアルプロジェクト」・茅ヶ崎市文化資料館

2012年度と2013年度の博物館実習については、学内実習として湘南校舎の図書館1階にある行谷遺跡展示室のリニューアルを進めるプロジェクトに取り組み、本学としては初めて茅ヶ崎市文化資料館において実習生全員の学外実習を行った。本節の前半で学内実習である「行谷展示室リニューアルプロジェクト」について述べたい。

行谷遺跡展示室(写真3)は、湘南校舎を建設する際に行われた遺物調査において発掘された縄文後期の土器や石器などが展示されている。これらの出土品の管理者は茅ヶ崎市教育委員会であり、博物館実習で取り上げるまでは教育委員会の文化財担当者が10年以上前に整えた展示ケースと解説パネルが壁に下げられているだけの簡素なものであった。この展示室の存在は、学生にもほとんど知られておらず、年に数回行われる市主催のツアーで見学者が訪れる程度の利用であった。国際学部にて学芸員課程がはじまり、この展示室が一番身近にある展示施設であることから、博物館実習の学内実習を行うことができるのではないかと検討し、教育委員会と調整した結果、文化財の担当者の協力を仰ぎながら、行谷遺跡展示室のリニューアルプロジェクトを進めることとなった。



写真3 行谷遺跡展示室の様子(2012年10月、筆者撮影)

行谷遺跡展示室のリニューアルを進めるにあたり、まずは実習生たちに考古学の基礎知識と行谷遺跡の特徴について理解してもらうことから始めた。基本的な文献を読み進める以外にも、茅ヶ崎市教育委員会の富永富士雄氏に大学にて茅ヶ崎における考古遺跡に関する講義を複数回してもらったほか、表面採集を監督してもらいながら行った(写真4)。表面採集では、大学の近隣の畑などに実際に足を運び、まだ残されている縄文時代の土器の破片などを採集した。実習生たちは、考古遺物である縄文土器が大変身近にあることを実感するとともに、行谷遺跡の存在を、展示を通して多くの人に知ってもらうことの意義を理解してもらえたように思う。



写真4 行谷遺跡における表面採集の様子(2012年11月、筆者撮影)

考古学に関連する文献を読み込むこと、専門家による講義、他の歴史博物館における縄文時代の展示などを視察するなどを通して、実習生たちは縄文時代と行谷遺跡の特徴への理解を深めていった。その成果を行谷展示室に実際に展示として完成させる形式で、このプロジェクトは進められた。

2012年度の実習生たちは、三つのグループに分れてプロジェクトを進めた。一つ目は展示班であり、解説パネルを全面的に改訂するとともに、竪穴式住居のレプリカを作成し、表面採集で見つかった縄文土器片を使った体験コーナーを制作した。この他に広報班は広報用のポスター(写真5)とチラシを作成し、市の教育委員会経由で市内の小中学校に配布と掲示を依頼した。SNSの活用も考え、Facebook上にページを作成し、情報発信を行った。また、教育普及班は展示室内で使えるワークシートを作成した(写真5)。ワークシートの設問についても、専門家に内容を確認してもらった。

2013年度についても、2012年度と同様に行谷展示室のリニューアルを行った。前年に作られたばかりの展示に手を入れてしまうことに抵抗もあったが、先輩たちが作った展示を間近に見ることが、実習生たちには大きな刺激となったようである。また、この展示室は

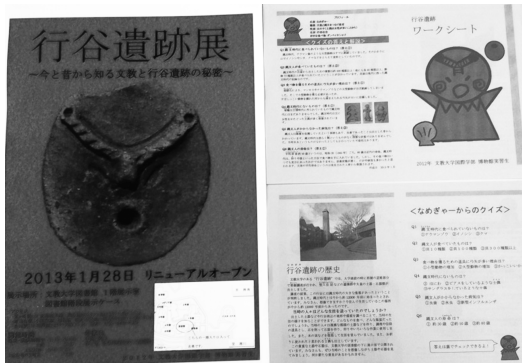


写真5 行谷遺跡展示室のリニューアルに合わせて学生が作成したポスターとワークシート

かつてロッカー室として使われていた部屋を転用したため、照明設備もなければ、解説パネルを取り付ける備品もなかった。今後もこの展示室を学内実習で活用していくことを想定して、平成25年度文教大学学長調整金を申請し、教育改善支援の枠組みの中でこの展示室の環境整備計画が採択された<sup>10</sup>。この助成金を受けたことで、行谷展示室の照明をLEDライトで照度の調整が可能なものに変え、展示ケース内の電源の改善をし、解説パネル用のピクチャーレールを3面の壁上部に設置することが可能となった。この環境改善を受けて、学生たちは学内で展示実習を行うことができるようになった(写真6)。



写真6 環境改善された行谷展示室で展示作業をする学生たち(2014年3月、筆者撮影)

2013年度の学内実習でリニューアルプロジェクトを進めるにあたり、解説パネルなどを担当する展示班、広報班、そして他の学生たちに行谷展示室を活用した導入プログラムを企画し実施する教育普及班に分かれて取り組んだ。展示班については、昨年のパネルを参考にしつつ、解説文章を見直し、パネルなどもレールに取り付ける形態に合わせて作り直した。広報班はポスターを作成する以外にも大学のウェブサイトの最新ニュースに掲載してもらうように交渉した。教育普及班は学部1年生で「ミュージアム入門」をテーマにした基礎ゼミナールを受けている受講生に向けて、行谷遺跡展示室に慣れ親しんでもらい、考古学への関心を高めることを目的とした導入プログラムを企画し、実行した。このプログラムは、ワークシートを使った展示室の見学のほか、展示室でのガイドや紙粘土を使って縄文土器を模したものを作るといった内容であった。学生が学生に向けて90分間の教育プログラムを実施したことは、学芸員に求められるコミュニケーション力や教育普及事業を組み立てるスキルを修得することにつながられたのではないだろうか。

次に、茅ヶ崎市文化資料館における学外実習について述べたい。茅ヶ崎市文化資料館は、それまでも学生たちから実習希望が複数寄せられていたが、受け入れ体制が整っていなかったため、実習生を受け入れてこなかったという。実習科目担当者と大学事務局の学事担当者とともに教育委員会ならびに資料館の学芸員に実習受け入れを打診し、交渉を重ねた結果、市側も市内唯一の大学である文教大学との連携を深めていきたいとのことから、2012年度から実習生を受け入れてもらうこととなった。学外実習は5日間にわたり、考古学や自然史学、民俗学に関するレクチャー、収蔵庫の民俗資料のクリーニング、拓本実習の他にも館のボランティアスタッフと交流する機会などが組み込まれていた。ガイダンスを含めると6日間にわたる茅ヶ崎市文化資料館における学外実習は、学生にとりそれまで学んできた博物館学に関する理論などが「理想的であり現実的ではない」と感じさせられたようであった。それだけ資料館とその関連施設における体験と学芸員から直接見聞きした

内容が印象深かったのであろう。講義科目で学んだ内容を理想論として一様に否定して終わってしまっただけの問題であるが、実習生たちも時間とともに講義や学内実習で学んだことと、学外実習で学んだことを租借し、折り合いをつけて自分なりに博物館への理解を深めてくれることが期待される。

#### 4.4 2014年度・第5期生：「ありがとう展」・自己開拓の学外実習

2014年度の博物館実習については、学内実習として学生たちが自主的にテーマを決めて企画した展覧会「ありがとう展」が開催されたことと、日本通運株式会社に出張講義を依頼し、美術品の梱包ならびに展示の特別実習を受けられたことが挙げられ、学外実習としては茅ヶ崎市文化資料館以外にも学生たちが各自で実習先を開拓し、実習した初年度となったことが特徴としてあげられる。

学内実習については、この年度より新カリキュラムに移行したため、秋セメスターから春セメスターに開講時期が移された。そのため、2013年度の実習生たちが制作した行谷展示室の展示完成から1か月しか経っていなかったことから、2014年度の学内実習については行谷展示室を使わない方法を取るようになった。実習生たちと話し合った結果、学内で企画展を開催することが決まり、展示テーマの候補がいくつか出された中から投票を行った。その結果、学内の各部署で仕事をしている教職員に焦点をあて、彼らの姿を紹介することで学生たちからの感謝の気持ちを伝えるという「ありがとう展」(会期：2014年7月11日～10月31日)(写真7)に決まった。



写真7 2014年度実習生による「ありがとう展」の様子（2014年7月、筆者撮影）

学内において企画展を開催するにあたり、企画書の作成、インタビュー対象となる教職員からの協力を得ること、展示場所の確保と交渉、展示に必要な材料の調達、展示の広報活動、展示が完成してから終了までのメンテナンスといった学芸員に実際に求められる業務内容をかなりカバーする内容を実習することができた。展示場所の確保については、大学博物館などを持ち合わせていないことから、当初は図書館入口付近などの空きスペースを使うことも検討されたが、図書館については一般の職員が滅多に足を運ばないことから、食堂など誰もが日常的に足を踏み入れる場所が検討された。しかしながら、日常業務の妨げにならないことや展示物の保管環境などを検討した結果、1号館(事務棟)の入口の空間を使うことが決まった。普段は博物館等のパンフレットや学生向けのリーフレットが置かれていたが、それらを移動してもらい、臨時の展示スペースとなった。

その後、学生たちはイーゼルなども使いながら、展示パネルを制作し、教職員へのインタビューと学生時代の思い出の品を貸借し、それらを展示していった。展示の対象とした部門は「学内清掃」「警備」「食堂」「教育支援課」「入学課」「図書館」「情報システム課」などであり、このキャンパスで学生たちが無意識のうちに関わっている人々を正面から取り上げることができた。また、この展覧会を見た人々からの反響を残すために、「ありがとうの木」というコーナーを設け、そこにはポストイットに展覧会を見た感想を書き残してもらうことで、見た人々がどのような感想を抱いたのかを記録していった。

夏季休暇も含め、約4か月にわたり展示は公開されていた。1号館は教育支援課もあり、各種証明書の発行機などもあることから、学生たちは足を運ぶ機会も多く、職員についても立ち寄る機会の多い場所であることから、反響も大きく、メッセージカードの中には職員からのものも見受けられた。これまでも学内では、専門ゼミナールの海外研修や研究の成果を模造紙にまとめ、それらを校舎の廊下などに貼り出したり、学祭の催し物として研究成果の展示を教室で開くことはあったが、学生たちが企画、展示、メンテナンスまでを引き受けて展覧会を行ったのは今回が初めてであった。学芸員養成課程の存在をキャンパス全体に向けてアピールする機会ともなった。

2014年度については、この他にも日本通運株式会社美術品事業部の青木秀雄氏に美術品の梱包ならびに絵画と掛け軸の展示と取扱いについて実技指導をいただいた。さらに茅ヶ崎市美術館の夏の展覧会である「夏の福袋2014：じぶんのいっぽ」(会期：2014年7月20日～8月31日)の担当学芸員ならびに参加アーティストの計らいから、展覧会の準備段階から実習生たちが参加する機会を得られ、作品の展示の作業を実際の展示室で行った。

春semesterの授業を履修し終えた学生たちは、それぞれに希望する実習先を見つけ、応募し実習していった。主な実習先としては、茅ヶ崎市文化資料館、はまぎんこども宇宙科学館、かわさき宇宙(そら)と緑の科学館(川崎市青少年科学館)、渋谷区立松濤美術館、横須賀美術館、美濃加茂市民ミュージアム、神奈川県立歴史博物館などであった。実習後に提出された実習ノートを見ると、それぞれにオリジナルの内容で学んできたことがわかる。国際学部の所属ゆえに実習を断られることもなく、学生たちは希望する館で充実した学外実習を受けることができた。

#### 4.5 2015年度・第6期生：茅ヶ崎市美術館「夏の3 DAYS らくがきとつながる自分とだれか」

2015年度の博物館実習では<sup>11)</sup>、茅ヶ崎市美術館で開催された企画展「正しいらくがき展」(会期：2015年7月19日～8月30日)の関連ワークショップ「夏の3 DAYS らくがきとつながる自分とだれか」の創案から実施までを行った。このワークショップについて美術館側で予め決定していたのは、夏の3日間限定で行うこと、申込制ではなく実施時間内であればいつでも誰でも参加できること、複数のプログラムを同時進行で実施することの三点であった<sup>12)</sup>。

2015年4月16日から5月7日までの4回の学内授業では、ワークショップを企画する上で必要な「美術館における教育」に関する講義を行った。また、ワークショップの現場となる美術館で、来館者がどのように過ごしているのかを知るために、実習生各自に「来館者の行動観察」を行うことを課題とした。4月16日と23日には、ワークショップにおけるファシリテーターの役割について考察するとともに、美術館の鑑賞補助教材を用いながら、「遊びを通して学ぶ」ことを体験してもらった。事前に美術館の学芸員から企画展で取り上げるアーティスト名と、らくがきや線がテーマであることを知らされていたので、4月30日に、線を意識するためのアクティビティを実施し、同時に他者と交流することで成立するプログラムを体験してもらった。その目的は、実習生がワークショッ

プの参加者の側に立つことによって頭で思っていることとの相違に気付き、それが新たな視点を得ることにもつなげたかったからである。5月7日には、アートを糸口として人と人をつなぐことを重視した国内外のファミリープログラムを取り上げ、対象者に即した具体的な事例を紹介した。その後、実習生は三つのグループに分かれ、展示作家について調べた上で、線やらくがきといったキーワードから考えられるワークショップの素案をつくり上げた。

5月14日、茅ヶ崎市美術館に行き、学芸員より美術館のコレクションとともに、ワークショップを実施する際のもとなる企画展について説明を受けた。その後、実習生は学芸員にワークショップの素案をプレゼンテーションし、学芸員の意見を加味しながら、内容を企画展とより関連するものに詰めていった。ユニークな内容であっても、美術館の実情にそぐわないものや、展覧会との関連が薄いと思われるものは改良し、修正を繰り返しながら内容を深めていった。

6月11日、前回の修正を反映させた企画案のプレゼンテーションが行われ、三つのワークショップが最終決定した。それらは、技法や創作を楽しむもの、描く行為を楽しむもの、見え方の違いを楽しむものと、それぞれ異なる内容を有している。一つ目は、偶然の線がおりなす模様を楽しむことを狙いとしていた。具体的には、紙を絵具で染めたり、紙に絵具をたらしてストローや口で吹く「吹き流し」の技法で模様を作り、その紙を団扇の骨組みに貼り、オリジナルの団扇を作るというものであった。題して「染めて！吹いて！うちわをもっと夏らしく！自分だけの模様を切り取ろう」である(写真8)。



写真8 「染めて！吹いて！うちわをもっと夏らしく！自分だけの模様を切り取ろう」(2015年8月、筆者撮影)

二つ目は、青、赤、黄の3色<sup>13</sup>の色水を入れた水鉄砲で、壁に貼られた大きな紙にらくがきをするというものである。通常とは異なる方法で線を描く面白さや、参加者同士が色水の線を交差させる楽しさを味わってもらうのが狙いであった。題して「WATER PAINTING! 水鉄砲で壁にらくがきしよう！」である(写真9)。



写真9 「WATER PAINTING! 水鉄砲で壁にらくがきしよう！」  
(2015年8月、筆者撮影)

三つ目は、予め用意した抽象的な形から、その形に好きなように描き足していった絵を完成させる見立て遊びである。同じ形でも人によって見え方が違うことを知って楽しんでもらうのが狙いであった。題して「きみはなにを想像する？絵はがきをかこう」である(写真10)。



写真10 「きみはなにを想像する？絵はがきをかこう」  
(2015年8月、筆者撮影)

各グループはワークショップの実施当日まで、内容に適した素材を選んでトライアルを重ねるとともに、懸念されることや配慮しなければならないことなどを探っていった。ワークショップの

実際の事前準備にあてることができた授業日は7月23日のみで、授業日以外に準備をせざるを得ないグループもあった。

ワークショップは8月7日から9日に実施された<sup>14</sup>。初日から予想をはるかに上回る参加者で、順番待ちが出来るほど盛況であった。実習生らは参加者が待ち時間も楽しめるよう新たな遊びを考案したり、待ち時間を縮められるよう手順を組み直したりするなど、準備段階では思いもよらなかった事態に臨機応変に対応し、延べ176名の参加者でにぎわった。参加者からは、「3つのブースにわかれていて、どれも飽きない工夫がされていて、とても楽しかった」「家ではできない事を体験させて頂いて子供は大満足でした」「どのワークショップも夢中になって遊んでしまいました。スタッフの学生がとてもフレンドリーで素敵なワークショップでした」といった感想が寄せられ、楽しんでもらえたことがうかがえる。実習生からは、「授業での様々な体験を通して、知識や技術だけではなく、想像する楽しさや、アートを通してコミュニケーションを取ることの大切さを知りました」「ワークショップの企画から運営までを実践するなかで、美術館と来館者との関わりについて学びました」といった感想があった。ワークショップを企画して実施するには十分な時間とはいえなかったが、実習生はほぼすべての過程を実践し、現場で学ぶことの重要性を感得できたのではないかとと思われる。

実習生たちは主に美術館における教育普及の理論と実例を学び、自分たちの手で企画し運営までやってのけたことは評価できるであろう。地域の美術館で大学生と交流できるという機会は滅多にないためか、参加した市民から好評であった。このワークショップの様子は茅ヶ崎市美術館発行の展覧会ドキュメント「正しいらくがき展：人間が描く！マシンが描く!?!」にも掲載されている。

## 5. おわりに：これまでの博物館実習の振り返って

文教大学国際学部において博物館学芸員養成課程が2008年に発足してから8年もの年月が流れ、本章で述べてきたように、それぞれの年度によって、様々な形態の試みが積み重ねられてきた。いずれの試みも、実習生たる学生自身の着眼点や行動力を重視しつつ、それらを地域の文化施設である茅ヶ崎市美術館や学内の行谷展示室などの公的な空間を使いながら、彼らの企画を形にしていけることができたことは、大学・学生と地域をつなげることが叶ったという意味で一つの成果といえるだろう。また、茅ヶ崎市文化資料館ならびに茅ヶ崎市美術館の学芸員、教育委員会の職員など、学外の方々が快く本学の博物館実習のプログラムに協力してくれたことは、ありがたいことであった。

今後もこのような形で大学と地域をつないでいくことを意識した博物館実習を進めていきたいと考える。その際には、理想論ではあるが、どちらか一方のみが恩恵を被るのではなく、双方にとりメリットのあるような、いわゆるウィン・ウィン(Win-Win)の連携が取れることが望ましい。この実現には、学内外の関係者間の綿密な打ち合わせが不可欠であり、それぞれが別個の業務を抱えている中で、双方の負担は決して軽くないことを念頭におきつつ、よりよい進め方を試行錯誤しながら追求していきたい。



- 1 浜田弘明(2015)「博物館実習の現状と課題—『博物館実習ガイドライン』を中心に—」全博協研究紀要(18)、pp.1-16
- 2 鷹野光行(1989)「学芸員養成における博物館実習について」Museum—立教大学博物館研究(35)、pp.1-4
- 3 文部科学省(2009)『博物館実習ガイドライン』文部科学省 p.1
- 4 文部科学省(2009)註3 掲載書、同頁
- 5 鷹野光行(1989)註2 掲載論文
- 6 文部科学省(2009)註3 掲載書 p.3
- 7 2008年度と2009年度入学生は博物館実習を3年の秋semesterで受講したが、2010年入学生以降はカリキュラムの改訂を受けて3年の春semesterに受講した。しかし、3年春semester開講となると、履修条件となっている科目群を未履修のまま実習を受講せざるを得ない学生が増加したことから、2014年度入学生から再び3年秋semester開講に変更している。
- 8 文部科学省(2009)註3 掲載書、同頁
- 9 Yuka Inoue, Maki Shimizu (2011) “Whale and Coral Stories with Us’ exhibition at Bunkyo University Shonan Campus: A Travelling exhibition and its educational use in higher education”, *Shonan Journal*, vol. 2, pp.54-68
- 10 平成25年度学長調整金採択課題「博物館学芸員養成課程の教育環境の改善ならびに教育プログラムの充実化」
- 11 担当者の育児休業のため、非常勤講師の藤田百合が担当した。本プロジェクトは茅ヶ崎市美術館と本学の連携事業の一環として実施された。
- 12 9月1日「正しいらくがき」展の搬出作業にも実習の一環として携わった。
- 13 この3色は企画展のアーティストが用いている限定色。
- 14 8月7日(金)、8日(土)、9日(日)の3日間のいずれも①11時から12時30分までと②14時から15時30分まで。